

審査の結果の要旨

氏名 住家正芳

住家正芳氏の学位請求論文「宗教的多元性の探究——宗教社会学における宗教的多元性と世俗化の理論的構図に関する研究」は、現代の宗教社会学の動向を踏まえて諸理論を批判的に吟味し、現代社会理論の水準に対応した新たな理論的視点を提起しようとした野心的論考である。

住家氏が批判的に吟味しようとする、第二次世界大戦後の宗教社会学の動向は次のようなものである。現代社会において信教の自由が認められ、政教分離が制度化される一方、市場経済の拡充や社会の多元化が進んでいくと、宗教は社会の中でどのような位置を占めることになるのか。世俗性が支配して宗教は私的な領域へと後退していくとする「世俗化」の理論に対して、新たに公共空間において宗教が重要な役割を果たすようになるとする「公共宗教」の理論や、市場原理の下で自由競争を行うことでかえって宗教が活性化するとする「合理的選択理論」が新たに注目されるようになってきた。しかし、住家氏はこれら現代宗教社会学の主要な理論的立場は、いずれも社会理論として徹底しておらず、現代の宗教状況を的確にとらえていないと論じる。

これらの理論はどれも、宗教や価値観の多元的な併存の下で、いかにして社会秩序が成り立つのかという問題を十分に考察していないが、そこにこそ住家氏の掘り下げようとする視点がある。宗教や文化的価値によって構成される秩序と、多元性を前提とした公共空間との関係をどのように調整するのが問われることになる。この問題を考察する恰好の素材として、1972年にアメリカ合衆国連邦最高裁で判決が下された「ヨーダー事件」が取り上げられる。伝統的な宗教的生活様式を守り続けようとするアーミッシュ派の親が、子供の高校進学を拒んだことを州側が違法として告発した事件だが、最高裁は親の主張を是とする判決を下した。宗教的少数派の主張が認められたことになったが、この判決の解釈から、個人の自由と信教の自由の関係について、市場原理や公共空間の概念と関わる新たな説明理論が求められることとなった。住家氏はそこに現代的な宗教的多元性を考察する鍵があるととらえる。

この問題をさらに解きほぐすために、住家氏は社会の基礎単位としての「意味」や「認知様式」といった概念にまで遡って、「社会」や「宗教」をとらえ返すという理論的検討の方法を選ぶ。タルコット・パーソンズやピーター・バーガーのような、社会理論と宗教理論を不可分のものとして考察してきた社会学者の仕事を踏まえつつ、彼らを超える理論的構図を素描しようとする。結論として住家氏は、宗教の多元性の根拠は、認知様式の共時的かつ通時的な多様性にあり、「社会」や「宗教」といった概念範疇の設定への批判を保障し得る公共空間の、合意や価値的統一とは異なった次元での制度的実現が要件となるとする。「宗教」とは何かが問われ続ける状況の中では、従来の宗教社会学のように宗教集団の併存のあり方として多元性を考察するのではなく、「宗教」についての認識の多様性に優位を与えそこから多元性のあり方を探っていくのが妥当だという主張である。

考察が抽象的な理論の検討に傾き、現実の宗教や個々の社会のあり方には十分にふれておらず、経験的な事実即ち検証がしにくい定式化となっているのは本論文の弱点である。しかし、宗教的多元性や世俗化をめぐるこれまでの諸理論、諸学説を巧みに整理し、新たな展望の下でそれを位置づけ直そうとする試みは成功しており、この分野での独自の貢献として高く評価されるべき業績である。よって本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績であると判断する。